

---

# よく分からない昔話 弐

一理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よく分からない昔話 弐

### 【Nコード】

N5911I

### 【作者名】

一理

### 【あらすじ】

黒い太陽に 三日間だけの記憶がないA  
走り続ける。

止まらぬように、生きるために、留まるな、死ぬな、生きるんだ。  
そして『忘れるな』

Aは生きるために走る。

## 亡くなった三日間

11月11日、朝四時にAは目覚めた。暗い窓の外を見ながらAは11月7日までの記憶はあるが、8・9・10日の三日間の記憶がないことに気がついた。

体が酷く疲れている……そこでAは気がつく、机の上に殴り書きされたような文字でたった四文字

『忘れるな』

それだけ書かれていた。恐らく自分の字だろうが全く記憶がないので、たいしたことがないだろう。なんとなくカレンダーをみる。今日は土曜日だ、体がなまっているのだろう、走ろうかと思いい服をラニングウェアに着替え財布を持って走りに出た。

『忘れるな』……なにかあったかな？ソレすらも思い出せない。日の光が広がっていく、いつきに闇を退けていくように……

今日は走りやすいな……

早朝だからだろうか、人通りがない上に車の通りが一つもない。

木・建物・川・公園・街中……そこまできてAはその不自然な異変に気がついた。

もう10時にもなるのに、人一人として今だ見ていない、それどころか車一台も、いつもなら騒々しい町の音も……何一つとして聞けない。

近くの家を除いても誰かが動いているような気配すら感じない。犬の小屋があるのに中は空っぽだ。

おかしい、

おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしい  
おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしい  
おかしいおかしい

どうして誰もいないんだ

人だけではない犬も猫も鳥も、魚すらもない。

ハツとしてAは空を見上げた。『黒い』……真つ黒な漆黒の太陽。  
恐怖が全身を駆け巡り防衛本能が足が急に走り出した。止まること  
を拒絶したかのように。

Aは近くの家に入った誰でもいいから人に会いたかったからだ。生  
きているものなら何でもいい。

しかし誰もいなかった。

かわりにメモが置かれていた。

『はしれ』

人を求めて各家に入っていく、不法侵入で怒るものは誰一人といな  
かった。

入る家の一軒一軒の机の上に紙があり、必ず短い文で書かれていた。

『進め』

『止まるな』

『動け』

『生きる』

『留まるな』

Aはとある家の部屋にあった紙を口にした。

『クロスケ』

それ以外は何も書かれていない。いずれにせよ詳しく書いて入られ  
ないぐらい人々はせわしく動いていたのであることは分かった。

防衛本能か、先ほどからAも動きつぱなしで体がへとへとであった。フト窓の外から黒い煙があがっているのが見えた。

.....

外に出てみると人が燃えていた黒く真つ黒く黒ずみに……『ク  
ロスケ』……

そうだ、Aは思い出した。

走り出した、とまらないように、燃えないように、死なないように、生きるために。

そうだ、そうだった、そうであつたんだ

三日前太陽は死の神と化した。

その光を一分以上浴びると体が黒い焔に苛まれ燃え上がり炭になる、そのカスを回収するように大地が影を吸い、燃えた人間は跡形一つも残らない。

家の中に居ても人は消えた。

分かることは朝の六時から午後の七時までには太陽は人間を殺しはじめる。その間立ち止めることは死ぬことなのだ。止まることは許されない。

太陽に燃える人々 黒く影となりて地に沈む

この現象は自然を冒流した人間への神の天罰だ。誰かが言った。

新時代の大きな序章だ。誰かが言った。

暗黒時代の幕開けだ。誰かが言った。

太陽の物質変化だ。誰かが言った。

誰かは去った。地に沈んだのだ。走ることを動くことを生きること  
を諦めたのだ。

全ての人物は諦めたのだ、なす術もないこの真実に目を逸らし、死  
を選んだのだ。

未来あるはずの小さな子どもや過去の栄光を持つ老人、まだ生き活  
きとした若い人はみんな……

このことがあまりにも衝撃過ぎてAは記憶を断片的に無くしてしま  
うのだ。きつと明日もまた今日の昨日の三日前の記憶がないのだろ  
う。三日間にはまだ生きていた人々もきつとそうだったに違いない。  
だから止まってしまわぬように、思い出すように、みんなはメモを  
残した。ずっと留まらなくてもいいような……。  
Aは叫んだ。誰か 誰も 誰もいないのか

生きなければ走れ

忘れるな このことを

消えた人々の分まで 生きて

生きなければ

走れ

(後書き)

実際にはこんな予定はないのでご安心ください。(そりゃそうだ)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5911i/>

---

よく分からない昔話 弐

2010年10月11日18時39分発行